



TITLE:

書評・永田貴聖著『トランスナショナル・フィリピン人の民族誌』

AUTHOR(S):

長坂, 格

CITATION:

長坂, 格. 書評・永田貴聖著『トランスナショナル・フィリピン人の民族誌』. コンタクト・ゾーン 2012, 5: 278-282

ISSUE DATE:

2012-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/177245>

RIGHT:

永田貴聖著

『トランスナショナル・フィリピン人の民族誌』

ナカニシヤ出版, 2011年, 3,500円+税, 215頁

長坂 格

本書は、日本社会あるいは日本人と係わりを持ちながら生活する「フィリピン人」と、フィリピン・マニラ首都圏に移住し、定住するに至った日本人についての民族誌である。ただし、書名にも示されているように、本書の主たる対象は、「世界を舞台として、支配する側との関係を変容させる『戦術』を実践しているフィリピン人たち」（5頁：以下、本書からの引用は数字のみ記す）と定義される「トランスナショナル・フィリピン人」である。そこで以下では、まず本書の内容を紹介した上で、フィリピンからの国際移動についての民族誌的調査をおこなってきた評者の関心に沿って、「フィリピン人」の移動の研究として本書が持つ意義を指摘し、併せていくつかのコメントを述べることにする。

序章「国境を越えて広がるネットワーク」では、まず、フィリピンでは人口の1割が国外に移住し、人々の社会関係のネットワークが世界規模に拡大している現状が指摘された上で、次の2つの研究目的が述べられる。すなわち、1980年代以降に来日し、日本とフィリピンを移動するフィリピン人たちが「日本人、フィリピン人双方と、国境を越えてトランスナショナルな社会関係を構築していく過程を記述すること」（4）、そして、「調査する人類学者とフィリピン人の関係が、僅かながら、国家の序列に翻弄された日本人とフィリピン人の関係を留保する可能性を備えているということを示すこと」（4）である。

これら2つの研究目的を果たすために導入されているのが、「日常的な調査」と、第1章でも説明される「個人を中心とする民族誌」という概念である。「日常的な調査」とは、人類学者が「最も身近に出会う周辺化された人々と、日常的に係わり、相互的に交渉すること」（5）を前提として、人類学者とインフォーマントが相互に影響を及ぼし合い、ときに人類学者がインフォーマントの「戦術」に関与するような調査プロセスないしは手法を指すと思われる。他方、「個人を中心とする民族誌」とは、日本在住の日系ブラジル人の民族誌を著したリンガーが用いている概念であるが、本書では、「様々な制約を受けている「個人（person）」が、人類学者を含む、様々な人々と関係を構築し、国民国家による管理や権利の制限という、支配する側の論理と向き合う「戦術」を解釈するもの」（175）として説明されている。

第1章「トランスナショナル・フィリピン人と係わる人類学的な実践」では、トランスナショナル・フィリピン人が形成する様々な関係を記述するための視点、方法論が検討される。著者によれば、これまでの在日外国人研究には、権利要求のための運動やエスニッ

ク集団などの既存の集団を対象とする手法、あるいは「外国人に対する権利の制限を告発するための調査方法論」(21)が採用される傾向が見られた。しかし、著者は、そのような方法では、「周辺化されている個々人が、日常生活において、時には強者である側の日本人の論理に適応し、また時には、国際的な序列による関係を乗り越えて、日本人との関係を形成」(21)する過程を捉えることはできないと論じる。そうした方法論上の難点を乗り越えるために著者が提示するのが、上述の「個人を中心とする民族誌」という概念である。そこでは、個人を焦点として、トランスナショナル・フィリピン人による多様な社会関係が形成される過程に焦点を合わせるという調査研究方針が示される。

第2章「80年代に来日したフィリピン人女性による日常の「戦術」」では、まず、80年代以降、多数のフィリピン人女性が歓楽街で「男性たちを接待する「エンターテイナー」」(52)として来日・就労し、その中から客である日本人男性と結婚する人々が出てくるようになった経緯が述べられる。また、そうした歴史的な経緯とともに、日本での「エンターテイナー」としての就労や日本人の配偶者としての生活における、彼女たちに対する制度的な差別や従属的な扱いが、「強者による支配の過程」(82)として説明される。そしてそうした日本人とフィリピン人の非対称的な関係を背景として、次に、「両親が事業を営み、経済的には豊かであった」が、「親から独立するため」に、1982年に21歳で「興行」資格で来日し、その後コンピューター会社勤務の日本人男性と結婚した女性Aさんのライフヒストリーが提示される。Aさんのライフヒストリーは、フィリピン人、女性、妻、嫁という位置のそれぞれにおいて弱者である彼女が、「複数の場所で強者の規範を習得し、強者と妥協、譲歩を繰り返し、自身の価値を多様化させ」と同時に、「強者の生活の生活世界の創造性を見つけ出し、彼らの価値観に影響を及ぼしてきた」(85)事例と解釈される。

第3章「グローバリゼーションの中の生活実践：マニラ首都圏の「日本人コミュニティ」で暮らす」では、2002年6月から2003年3月にかけて実施されたマニラ首都圏の日本人コミュニティでのフィールドワークに基づき、80年代以降に企業の駐在員としてフィリピンに移住した日本人男性と妻であるフィリピン人女性たちによる、「日本人コミュニティと現地の社会を往来する実践」(88)が考察されている。そこでは、一組の夫婦の事例を中心に、日本人男性が、フィリピン人の習慣や価値観に葛藤しつつも適応していく過程と、パートナーであるフィリピン人女性が、フィリピンにいながらにして日本人コミュニティに編入されていく過程が、「二つの国民国家の価値観、言語を習得し、巧みに使い分け、社会関係を構築するという一つの事例」(90)として分析されている。

第4章「拡大するマニラ首都圏の日本人コミュニティ：棲み分けと日本への新たな移動」では、マニラ首都圏で2005年から2007年にかけて約6カ月間実施されたフィールドワークに基づき、非駐在員の親睦団体の活動、日本人学校における日比二世と駐在員の子どもたちとの「棲み分け」の様相、フィリピン在住の日比二世の言語習得、NGOによる日本にルーツを持つ人々の身元確認運動が論じられる。日本生まれだが、両親がフィリピンに移住したため、フィリピンの日本人学校で学び、現地の大学を卒業した後に日本で就労するという、これまでのフィリピンからの移住研究ではあまり焦点が当てられてこなか

ったような日比二世の男性 H さんのライフヒストリーの提示などを通して、フィリピンから日本への人の移動の多様化が指摘される。

第5章「越境し続けるネットワーク：新しい世代のトランスナショナル・フィリピン人たち」では、こうした人の移動の多様化のなかに位置づけられる事例の記述分析が行われる。具体的には、日本人の父とフィリピン人の母を持ち、マニラ首都圏で育った後、11年前に来日した日本国籍を持つ30代前半の女性 K さん、母親が日本人男性と再婚したため、「定住者」資格を取得して来日し、その後日比間を往復する生活をしている20代後半の男性 L さんのライフヒストリーが提示される。著者によれば、彼ら90年代以降に来日したフィリピン人たちは、「フィリピン人既婚女性たちが中心となって築き上げた日本人、フィリピン人双方を介在させる社会関係を媒介にして、日本社会に定着し」（146）てきた。そして、上記の2人のライフヒストリーの分析からは、彼らが「様々な制約がある中で、限定された機会を利用する「戦術」により、日本・フィリピン両国間に跨る関係を構築している」（169）と指摘する。

終章「人類学者が「日常的な調査」を実践し、「戦術」に関与する」では、それまでの記述を踏まえ、人類学者が「日常的な調査」を通して人々の「戦術」に関与することの意義が論じられる。インフォーマントとの立場の違いを認識しつつ、国民国家の権力によって排除された身近にいる人々との直接的な係わりを通して彼らの「戦術」を民族誌的に記述することが、彼らの生き方そのものに価値を見出すことにつながりうること、そして「日常的な調査」の実践がインフォーマントによる「戦術」の洗練にたとえ僅かであっても寄与しうることなどが述べられる。

以上のようにまとめられる本書における、「トランスナショナル・フィリピン人」についての記述分析の重要な背景となっているのは、1990年代以降の、在日「フィリピン人」社会の多様化の進行である。ここでの多様化とは、入管法の改定（1990年）を一つの重要な契機として、「戦前に移住した日本人の孫であるフィリピン残留日系人三世や、80年代前後の日比国際結婚の増加によりフィリピンで生まれ育った日比二世、日本人と再婚したフィリピン人の未成年の連れ子など、日本人と親族関係を持つフィリピン人たちが、合法的な在留資格や日本国籍を取得し、定住化」（6）するようになった事態を指す。

本書の貢献は、こうした在日「フィリピン人」社会の多様化状況を正面から扱った点にある。そうした観点から見ると、第4章の日本生まれの日比二世で日本国籍を持つが、両親のマニラの移住後にマニラの日本人学校で学び、高校から現地校に入り、現地の大学卒業後に日系企業に就職した後に、日本で働いている H さんの事例と、第5章の同じく日比二世で、日本生まれで日本国籍を持つが両親の離別により3歳からフィリピンで育ち、フィリピンの現地校に通い、大学を中退した後に来日して、当初は繁華街で就労し、後に工場で就労している K さんの事例は特に興味深い。これらの事例は、日比間において生起しつつある現象の把握を促すという実証的価値のみならず、こうした事例が主題化されることが極めて少なかった国際移住研究の視野の限定を浮き彫りにするような理論的潜在力を持つとさえ言えるかもしれない。

また、著者が、出身国別の集団・組織を調査単位とすることで見えにくくなる、ネーシ

ヨンの境界を越えて形成される多様な社会関係を、自らの家族史を語るなかで対象化し、さらにそうした社会関係の形成過程を「個人を中心とする民族誌」として描き出そうとしていることは、特に上記の在日「フィリピン人」社会の多様化状況を踏まえれば、興味深い知見をもたらしうる、有力な調査研究の方向性であるといえる。

しかし、こうした興味深い対象、調査研究の方向性を採用した本書には、資料提示あるいは分析において、慎重さや厳密さが欠けているように見えるところもある。例えば、第2章のライフヒストリーの考察部分において、筆者は、語り手であるAさん自身の価値観が日本での生活のなかで多様化していったことだけでなく、Aさんの「戦術」の実践がAさんの周囲の人々の価値観に影響を及ぼしたことを強調している。しかし、Aさんの周囲の人々へのインタビューや参与観察の資料が提示されていないなかで、いかにしてこの主張は正当化されるのだろうかという疑問が生じる。

また、個人を中心に置き、日本人を含む彼らの社会関係の構築の過程を記述するという本書の研究目的から見ると、Aさんのライフヒストリーの記述には、来日後の彼女のどのような交友関係が、いつ、いかなるコンテキストにおいて構築され、そして維持・再編成されてきたのかという、関係構築・再編成の具体的なプロセスについての語りがあり含まれていない点で物足りなさを感じる。こうした社会関係構築の具体的なプロセスについての資料提示の不足は、第5章におけるKさんとLさんのライフヒストリーにも見受けられる。Lさんについては、日本の職場におけるフィリピン人以外との人間関係についての言及があるものの、日本での生活の各段階において、どのような人々といかなる相互行為がなされているのかというような、社会関係の詳細についての描写はなされていない。著者は、結論部分において、人類学には、行政によって主導される多文化共生に貢献するという形だけでなく、「周辺に置かれている外国人たちが日本人と日常的な関係を構築できる可能性を明らかにする」(183)という貢献の仕方があると述べている。評者はこの指摘に共感を覚えつつも、そうした「貢献」のあり方は、日常的な関係の構築過程についての文脈に位置づけられたより慎重かつ丁寧な記述がなされることで、さらに有効性が高まるのではないかと考える。

本書の調査方法論として言及される「個人を中心とする民族誌」についても、その視点が必ずしも十分に発揮されていないと思われる箇所が見受けられる。例えば、第2章のAさんのライフヒストリーの分析のなかで、著者は「来日前から持つ価値観であるカトリック」(75)という表現を用いている。そこでは、階層や時代などによって多様なあり方を見せるフィリピンのカトリック信仰が一枚岩的に捉えられている点に加え、この「価値観であるカトリック」が、日本への移住の過程で当事者によっていかに再解釈されているのかについての検討がなされないまま、いわば与件のように扱われているところにやや違和感を覚えた。

「個人を中心とする民族誌」を提起した人類学者として筆者が引用しているリンガーは、著者も言及し、検討している「反省的意識 (reflective consciousness)」という概念を用いて、歴史や文化に還元することができない、人々による、特定の状況においてなされる予測困難な自己省察や自己形成の過程を把握することの重要性を主張している [Linger

2001:13-14]。本書においても、こうした視点は、著者が本書の序論において、「トランスナショナル・フィリピン人たちと係わる過程において、自分という個人を反照的に意識し始めた」(7)と述べているように、著者自身に対しては適用されており、その点は本書の魅力の一つとなっている。しかしその一方で、Aさんだけでなく、第5章における2人のライフヒストリーの記述においても、インフォーマントたちの「反省的意識」は必ずしも十分に焦点化されていないように見える。著者を含む日本社会の人々との係わりにおいて、対象となった人々が、自らの価値観をいかに再解釈し、その中でいかなる自己省察をおこなってきたのか、そうした観点がより意識的に導入されていれば、本書の「個人を中心とした民族誌」の記述は人々の移住経験をさらに厚みを持って捉えることを可能にしたのではないかと思われる。

以上、フィリピンからの国際移住研究をおこなっている立場からコメントしたが、本書において、著者が日比間の人々の移動の多様化の進展に注目し、さらにそこに見られる制約のなかでの個の創造性に焦点を当てたことは、今後の日本の「フィリピン人」、あるいは「外国人」についての研究にいくつかの着想をもたらさうと思われる。著者による在日「フィリピン人」の調査研究のさらなる展開・深化を期待したい。

参考文献

Linger, Daniel Touro 2001 *No One Home : Brazilian Selves Remade in Japan*. Stanford: Stanford University Press.